

国内ではほとんど報道されなかったが、アメリカでは大きく報道された「福島原発事故前後に生まれた子どもの病気」に関する貴重な論文がある。著者は、名古屋市立大学の村瀬香准教授ら3名。同氏らは、チェルノブイリ原発事故で先天性心疾患が増えた事実から、福島原発事故でも同様な被害がなかったかどうかを調べた。その結果、事故前後で、新生児の先天性複雑心奇形が、日本全体で増加していることが分かった。他にも、停留精巣と呼ばれる男児の先天性疾患の増加も明らかになった。

事故前からのデータが決め手

この調査を行うにあたって村瀬教授らは、日本胸部外科学会が、福島原発事故前から全国の病院を対象に先天性心疾患の手術データを集めていた事に着目した。日本胸部外科学会は、全国の胸部外科関連病院（500～600）に、心臓外科手術実施に関するアンケートを毎年行っており、結果を公表している。村瀬准教授等は、そのデータを解析した。その中で、高度な手術を要する複雑な先天性心疾患（複雑心奇形：29種類）に着目し、福島原発事故前後の変化を解析した。その一部の図を引用する。

事故前は出生数10万人当たり210～230人だった複雑心奇形手術数が、事故後は240～260人に増加した事が分かる。その内訳は、左右の心房の隔壁の欠損が47.7%増加で最も大きく、その他も含めて29種類のうち9種類の心臓疾患で、先天性異常が増加した。

事故前後の平均増加率は14.2%で、統計的に有意な増加である。特に0歳から1歳までの手術数増加が顕著で、1歳から17歳の子どもの手術数の増加はなかった。これらの奇形は、胎児の発生初期に起こった可能性が高いという。

この結果について著者らは、増加の原因が原発事故とは断定できないが、原発事故による放射能の影響の可能性は排除できず、母親達の被ばく線量や事故時の居住地など、更なる精密な調査が必要…としている。論文は、アメリカ心臓学会機関誌（2019年3月13日）に掲載された。名古屋市立大学は、翌日記者会見も行い研究結果を公表したが、国内のマスコミは全く取り上げなかった。この他、村瀬准教授らは、同様な調査が全国の35県94病院で行われた「新生児の精巣の手術件数が、原発事故後に増加した」という論文も、国際雑誌「Urology(泌尿器科学)」に公表している。（2020年1月29日 河田）

